

第36回 獨協インターナショナル・フォーラム
The 36th Dokkyo International Forum 2025

東アジア 識字研究の現在

— その到達と課題 —

Literacy in East Asia: Research Findings and Issues

2025年12月13日(土)・12月14日(日)

対面・オンライン併用で開催し、どなたでも参加いただけます。
参加希望の方は、対面・オンラインともに、下記QRコード又は
獨協大学HP「獨協フォーラム2025」から参加申込みをしてください。

- 対面会場：獨協大学 天野貞祐記念館大講堂
- オンライン：参加申込者あてに、後日URL (Zoom配信) をメールでご案内します。
- 使用言語：日本語、韓国語、中国語 (通訳又は翻訳あり)
- 参加費：無料
- 定員：500名 (先着順)
- 主催：獨協大学国際交流センター
- 後援：獨協大学国際教養学部、教育史学会、
埼玉県、草加市、獨協大学同窓会
- 問合せ：獨協大学国際交流センター
TEL: 048-946-1918
E-mail: a-kokuse@stf.dokkyo.ac.jp

対面・オンラインともに
参加申込みはこちら
(申込み締切り12月12日)



東アジア識字研究の現在 ―その到達と課題―

コーディネーター：川村 肇 国際教養学部言語文化学科 教授
松岡 格 国際教養学部言語文化学科 教授

■開催趣旨

識字研究の現時点には様々な問題が、層構造をなしている。

その第一の問題群は、日本から見た場合の識字の史的解明である。この20年ほどの間に大きな進展を見せたが、中世以前の識字など、明らかになっていないこともまだ多い。日本史研究者と日本教育史研究者との間の認識にもかなりの相違がある。

第二に、東アジア全体から見た場合の、中国漢字・漢文文化圏からの「離脱」と「摂取」の実相の解明である。日本、朝鮮、ベトナムなどでそれぞれ独自の文字が作られたが、その普及のあり方と漢字・漢文との関係は、三国それぞれが大きく異なる。それを比較検討する課題はまだ着手もされていない。

第三に、同一の視点から見方を変えて、漢字そのものの識字ないし識字教育の検討である。近代に至って文字の形を異にし、ともに文化的多様性を有する中国本土と台湾の

識字および識字教育の実態について解明が必要である。また、日本における漢字を含めた識字教育とも比較検討することが求められる。

世界に眼を広げた場合、第四に、アルファベット等の文字の識字および識字研究との比較検討である。さらには、諸文字文化の識字研究との接合が遠い先の課題としてある。

そして第五には、これらの問題群の基層に位置する課題、すなわちそもそも文字を持つということについての歴史的人類学的哲学的考察である。この基層的検討は、もちろん上記四つの問題群と呼応しつつ、より深められていく。

このフォーラムは、上述の課題にそれぞれの視点からの研究報告を受け、研究交流を深めるとともに、今後の国際識字研究の課題を提示するものとしたい。

■プログラム

▷12月13日(土)

タイム テー ブル	10:00	開会挨拶 前沢 浩子(獨協大学学長) 趣旨説明および参加者紹介 コーディネーター 川村 肇・松岡 格
	10:30	発表「日本教育史の識字研究史」川村 肇(獨協大学)
	10:50	発表「日本中世の識字状況と鎌倉仏教」大戸 安弘(筑波大学名誉教授)
	11:30	発表「文学にみる17世紀後期の識字をめぐる社会状況」木村 政伸(西南女学院大学)
	12:10	休憩
	13:10	発表「明治期日本の識字状況と学校」八楯 友広(放送大学)
	13:50	発表「書記行為からみる在村医の読書と医学学習」古畑 侑亮(獨協大学)
	14:30	総合討論Ⅰ
	16:20	講演「文字と権力及び触覚」出口 颯(島根大学名誉教授)
	17:30	二日目の予定について コーディネーター 川村 肇

▷12月14日(日)

タイム テー ブル	10:00	発表「台湾の言語と識字について」松岡 格(獨協大学)
	10:20	発表「台湾語の表記と識字について」林 修澈(台湾・政治大学名誉教授)
	11:10	発表「台湾先住民言語における漢語の受容について」黄 季平(台湾・政治大学)
	12:00	休憩
	13:00	発表「朝鮮後期における階層別の文字解読(文解)の様相の多様化」朴 鐘培(韓国・東国大学校)
	13:40	発表「漢字・チュノム・ローマ字の使い分けとリテラシー」岩月 純一(東京大学)
	14:20	総合討論Ⅱ
	15:50	閉会挨拶 野原 ゆかり(獨協大学国際交流センター所長)